谷川裕稔編（2017）『アメリカの大学に学ぶ学習支援の手引き』ナカニシヤ出版

Book Review –Hirotoshi TANIGAWA (2017) *Clues for Adapting American Learning Assistance into Japanese Higher Education: From Historical and Practical Perspectives*

大西　好宣
ONISHI Yoshinobu

要旨　高等教育分野における新たな専門職として、学習（修）支援への関心が高まっている。本書は当該分野で世界の先端を行く米国の事例を、障害を持つ学生に対する支援や中退の予防、さらにはリメディアル教育やアクティブ・ラーニングの意義など、様々な視点で紹介した研究成果である。全体の構成は、米国の高等教育を概観した第 1 部、学習支援の歴史を六つの章で順に辿った第 2 部、そして日本への教訓に触れた第 3 部からなる。量的な意味（頁数）では第 2 部が中心で、本書の白眉と言えるものの、今後の日本を考える際にはむしろ、豊富なデータと日米の現状比較に基づいた第 3 部の冷静な議論が、我々大学人にとっては最も参考になるだろう。

1、背景

2019 年 11 月、文部科学省が史上初となる全国学生調査の試行実施を発表した。その趣旨として、同省 HP には次のような説明がある。

> 「全国学生調査」は「学修者本位の教育への転換」を目指す取組の一環として、全国共通の調査項目により、学生目線から大学教育や学びの実態を把握し、大学・国の双方において様々な用途に活用しようとするものです。本年度は、適切な調査方法や質問項目などを整理・検証することを目的とする試行調査という位置づけで実施します。

ここでのキーワードは「学修者本位」及び「学生目線」の二つであろう。すなわち、従来一般的であった、教員が学生に何を教えたかという視点から、学生が大学在学中に何を学んだかという価値観への転換である。全国学生調査の試行実施は、そうした近年の新たな動きを背景にしている。

この文脈で最近注目を集めているのが、大学などの高等教育機関における学習（修）支援という専門的な職域である。本来は入試に関する専門職である admissions officer や、研究支援に関する専門職 research administrator、大学内統計データの専門職 institutional researcher などと並んで、米国では一般的に知られているものの、日本ではまだ余り馴染みがない職域の一つである。

2、本書の概要と構成

本書は当該分野で世界をリードする、米国の事例を紹介したもので、それ以前に米大学の学習（修）支援に関する日本語の資料としては、清水（2015）による『アカデミック・アドバイジング　その専門性と実践　日本の大学へのアメリカの示唆』がある。学生アスリートに対する学習支援の負の側面を報告したガーニー（2017）らによる研究と宮田（2018）

によるその邦訳も、学習支援職の全体像を把握する上では有用であるが、そうした応用編に進む前に、まず手に取るべきは前掲の清水によるものや本書のような基本文献であろう。本書は以下のような 3 部による構成となっている。

第 1 部　アメリカの高等教育場面の学習支援を概観する

第 1 章　アメリカ高等教育の現代の様相

1　アメリカ高等教育の多様性 /　2　高まる学位へのニーズと学生の学びの継続力の問題

第 2 章　アメリカの大学生の「学び」をめぐる議論

1 「学習時間」と「学習成果」をどう考えるか /　2　まとめと日本への示唆

第 3 章　学習支援の枠組み 「専門性」からの観点

1　問題の所在 /　2　学習支援の基本的枠組み /　3　言説を援用する識者 /　4　専門性の確立を求めた理由 /　5　学習支援分野の専門性・研究者による見解 /　6　敷衍的考察 /　7　まとめと日本への示唆

第 2 部　歴史的観点からアメリカの学習支援を考える

第 4 章　学習支援の萌芽期　1600 年代—1820 年代

1　時代背景 /　2　対象学生 /　3　カリキュラム上の位置づけ /　4　教授法・学習方略 /　5　問題点と課題

第 5 章　教授法・学習方略の変革初期　1830 年代—1860 年代

1　時代背景 /　2　対象学生 /　3　カリキュラム上の位置づけ /　4　教授法・学習方略 /　5　問題点と課題

第 6 章　組織的な学習支援部局の設置期　1870 年代—1940 年代

1　時代背景 /　2　対象学生 /　3　カリキュラム上の位置づけ /　4　教授法・学習方略 /　5　問題点と課題

第 7 章　学習支援の爆発的拡大期　1940 年代—1970 年代

1　時代背景 /　2　対象学生 /　3　カリキュラム上の位置づけ /　4　教授法・学習方略 /　5　問題点と課題

第 8 章　教授法・学習方略の開花期　1970 年代—1990 年代中期

1　時代背景 /　2　対象学生 /　3　カリキュラム上の位置づけ /　4　教授法・学習方略 /　5　問題点と課題

第 9 章　包括的な学習支援アプローチ期　1990 年代中期—現在

1　時代背景 /　2　対象学生 /　3　カリキュラム上の位置づけ /　4　教授法・学習方略 /　5　問題点と課題

第 3 部　展望：日本の学習支援の可能性を模索する

第 10 章　ターム使用上の混乱　リメディアル教育と初年次教育の概念区分

1　はじめに /　2　アメリカ関連学会の動向 /　3　中教審答申による定義とその限界 /　4　2 つの限界に対する提案 /　5　まとめ

第 11 章　教授法・学習方略の実践　アクティブラーニングという方法

1　アクティブラーニングのアメリカの学習支援場面での位置づけ /　2　「アクティブラーニング」が日本の大学教育を席巻する背景 /　3　学習支援の観点からアクティブラーニングのあり方を考える

第 12 章　学習成果・評価のあり方

1　主体的学習への質的転換の一翼となる単位制度の実質化に関する課題 /　2　学習成果アセスメントと機関別認証評価に関する議題 /　3　解決の可能性

第 13 章　「定着」率の向上の（ママ）関わる学習支援の役割

1　日本の高等教育機関における中途退学の実状と背景 /　2　定着・継続在籍に向けてのアメリカ高等教育機関の取り組み /　3　Retention/persistence/attrition の定義 /　4　定着率を高めるための方略・戦略 /　5　日本での可能性

第 14 章　「障害学生支援」的観点の欠如

1　日本の高等教育機関における障害学生の現状 /　2　日本の高等教育機関における障害学生の支援体制の現状 /　3　アメリカの高等教育機関における障害学生支援の取り組み /　4　日本の高等教育機関における障害学生支援体制の構築にむけて

3、学「習」支援と学「修」支援の違い

内容の詳細を述べる前に、まず本書で用いられている学習（修）支援という用語の定義について説明しておかなければならない。具体的には、学「習」支援と学「修」支援の違いである。先に紹介した清水（2015）は、両者は本来異なるものであると述べる。具体的に言えば、学習支援は従来、英語で learning support または learning assistance と呼ばれ、それがカバーする範囲は広い（図 1 の①～④全て）。これに対して、英語で academic advising と呼ばれる学修支援は学習支援の一部（同①と③のみ）に過ぎないという指摘である。

図 1　学習支援とアカデミック・アドバイジングの違い

学習支援

アカデミック・アドバイジング

①学習に関連する情報の提供	②個別科目に関わる援助
③履修指導・相談	④学生の学習を促す環境整備

出典　清水（2015）p.11.

この点においては本書でも齟齬はない。本書のまえがき（*ii* 頁）で、編者である谷川は次のようにわざわざ断っているからである。

本書では「学習支援」というターム（用語）を意図的に用いている。というのも、筆者は「学習」を、（日本で用いられている単位制度と一体化した概念である）「学修」を包摂する広い概念と捉えているからである。加えて、「学習」は「学修」を下支えする営みというスタンスをとっている。

そうした谷川の言葉を裏付けるように、本書のタイトルである学習支援の英語訳は

learning assistance となっている。さらに本書では、おそらく図 1 の④の領域に関わるであろう、アクティブ・ラーニングなどの具体的な教授法やリメディアル教育などについても扱われており、こうした点で学修支援、つまりアカデミック・アドバイジングについて概説した前掲の清水による書籍とは異なる様相を呈している。因みに、本書 26 頁において谷川は学習支援を以下のように定義している。

> 大学院生を含む高等教育機関（ここでは大学、短期大学、高等専門学校、専修学校専門課程）に学ぶすべての学生と入学を予定している高校生に対して、必要に応じて学業に係る支援を高等教育機関側が組織的・個別に提供する営み、またそのサービス・プログラムの総称

4、本書を読み解く

清水による書籍が単著であったのと比べ、本書は編者である谷川以下、野田、奥村、壁谷を含む計 4 人の著者によって執筆されている。米国の大学における学習支援誕生の経緯やその変遷など、歴史的視点に関する記述に重きが置かれているものの、複数の著者による分担著であるという利点を生かし、前章で触れたようにアクティブ・ラーニングなどの具体的な教授法やリメディアル教育など、実に多彩な視点が紹介されていて興味深い。以下、順を追って見て行こう。

(1)「第 1 部　アメリカの高等教育場面の学習支援を概観する」について

本書はあとがきや索引まで含めれば 190 頁近いが、第 1 部はそのうち 40 頁を占めるに過ぎない。要は導入部である。そのため、米国の高等教育制度に関して一定の知識を有する読者であれば、野田による第 1 章及び第 2 章は読み飛ばすことも可能だろう。但し、学習支援という職域がどのように専門性を獲得して行ったか、或いは現在獲得しているかについて述べた、谷川による第 3 章は、専門職としての学習支援を考える上での本質的な議論でもあり必読である。

(2)「第 2 部　歴史的観点からアメリカの学習支援を考える」について

第 2 部は編者の谷川自身による、米国における学習支援の歴史に関する詳細である。前項で触れた、学習支援職の専門性に関する谷川による第 1 部・第 3 章は、本来であれば第 2 部のどこかに含まれていても良かったと思う。

具体的には、1600 年代の萌芽期から 21 世紀の現在までの学習支援の発展について六つの章に分けて紹介しており、例えば 1870 年代—1940 年代を扱った第 6 章には「組織的な学習支援部局の設置期」といったような、その時代がどのような性格を有していたかについてのわかりやすいキーワードが付されている。さらにどの章においても、「1　時代背景 / 2　対象学生 / 3　カリキュラム上の位置づけ / 4　教授法・学習方略 / 5　問題点と課題」という一貫したフレームワークを用いて著述しており、読者の理解が容易になるような工夫がされている点は好感が持てる。

また、学習支援の発展が既に 1600 年代に始まっているという本書の認識は重要である。何故なら、もう一方のアカデミック・アドバイジング、すなわち学修支援については、第

一次世界大戦後の米国陸軍の試みを参考にした職業選択上の助言、今で言うキャリア・ガイダンス或いはキャリア・アドバイジングが基盤となって徐々に発展したとされているからである（Gillispie, 2003）。

この第 2 部は他と比べ、最も多い頁数を費やしている、いわば本書の白眉とも言える部分であり、それだけに編者である谷川の面目躍如とも言える重要なパートである。確かに、個別にはジャーナルキーピング（本書 102 頁）といったような日本では耳慣れない試みがある事実も紹介されているものの、米国の大学史について大きな流れが既に頭に入っている読者にとっては周知の事実が多く、結果としてやや退屈と感じられるかもしれない。

(3)「第 3 部　展望：日本の学習支援の可能性を模索する」について

第 3 部は 50 頁と、第 2 部に比べて分量は少ないものの、今後の日本を考える際にはむしろ、豊富なデータと日米の現状比較に基づいた第 3 部の冷静な議論が、我々大学人にとっては最も参考になるだろう。例えば、第 12 章では学習成果をより高めるため、これまでの単位制度を再評価し、その実質化を図ることが重要だと訴える。さらに最後の第 14 章では障害を持つ学生への支援方策について考えている。いずれも本邦大学の課題とされる分野であり、米国の試みは参考事例として有益だと思われる。

ただ、第 13 章で扱われている大学中退の防止策の必要性と米国の事例については、わが国の現状を考えれば、例えば優先順位という点で異論も多いのではなかろうか。というのも、著者自身が認める通り、わが国の大学の中退率は現状で米国ほど高くなく、それほど深刻な問題とはなっていないからである。本書 156 頁欄外の注によれば、日本の大学中退率は 10％、米国のそれは 47％と大きな開きがある上、日本の数値は OECD 諸国の平均値 32％をも大きく下回る優等生なのである。米国の大学で真剣に取り組まれていることが、必ずしも日本の現状には当てはまらないという事例のひとつとも言えよう。

引用及び参考文献

清水栄子（2015）『アカデミック・アドバイジング　その専門性と実践　日本の大学へのアメリカの示唆』東信堂

大西好宣（2016）「書評：アカデミック・アドバイジング　その専門性と日本の大学への示唆」『人文社会科学研究』第 33 号、pp.120-123., 千葉大学

大西好宣（2018）「アカデミック・アドバイジング（学修支援）の現在と未来：米国 NACADA 2018 年次大会に参加して」『大学マネジメント』Vol. 14. No. 8, pp.37-45., 大学マネジメント研究会

大西好宣（2019）「書評：アメリカの大学スポーツ　腐敗の構図と改革への道」『人文社会科学研究』第 39 号、pp.84-91., 千葉大学

ジェラルド・ガーニー、ドナ・ロピアノ、アンドリュー・ジンバリスト（2017）『アメリカの大学スポーツ　腐敗の構図と改革への道』（宮田由紀夫訳 2018）玉川大学出版部

Gillispie, B.(2003). *History of academic advising*, National Academic Advising Association